



「核融合の歴史を遺す座談会」出席者の紹介

標記座談会には、合計29名の方々のご参加を得、貴重なご発言をいただいた。皆様を「自己紹介」をベースで紹介する。お名前の中の[黎]は座談会「黎明期・揺籃期」,[成]は「成長期」,[共]は「共同利用と共同研究」,[国]は「核融合研究と国際交流」の参加者をそれぞれ意味する。(五十音順)

飯吉厚夫：[成] (いよいよ あつお)

中部大学総長。1999年中部大学学長に就任するまでは、核融合科学研究所初代所長。現在は国立大学法人評価委員、科学技術学術分科会委員として、我国の学術研究および研究体制のあり方について提言しているが、その効果のほどは疑問と思っています。

池上英雄：[共] (いけがみ ひでお)

プラズマ研究所ではプラズマの基礎実験を担当、1990年頃には常温核融合の真偽確定実験を行ったこともある、1996年に核融合科学研究所を定年退官。名古屋大学および核融合科学研究所名誉教授。1996年に株式会社テクノエイブを設立、代表取締役として各種企業の技術コンサルタントを行う。現在の主題は燃料電池の開発。

石野 葉：[国] (いしの しおり)

専門は原子炉材料、核融合炉材料の特に照射損傷。著書に「照射損傷」(東京大学出版会、1979)など。1994年まで東京大学工学部教授、その後東海大学工学部教授、(財)電力中央研究所研究顧問等を歴任。元核融合会議メンバー。日米核融合協力事業(Annex I) FFTF/MOTA プロジェクト日本代表。現在 Journal of Nuclear Materials 誌エディタ。

市川彦彦：[国] (いちかわ よしひこ)

原子核の多体問題に関心を持ち、クーロン力の長距離相互作用によるプラズマ効果に興味惹かれプラズマ物理の虜になる。日本大学理工学部講師、同教授、プラズマ研究所教授、核融合科学研究所教授を経て、中部大学工学部教授。その間、日本学術会議物理学研究連絡委員を務め、第1回プラズマ理工学国際会議の名古屋での開催に尽力。1985-86年日本物理学会会長を務める。

内田岱二郎：[成] (うちだ たいじろう)

大学出てから50年余、その6割の年月を学界で、残りを産業界で過ごした。先日、それらのまとめとして2008年春の80歳直前に、Inst. of Physicsより論文がTopical Reviewの1つとして掲載された。思えば20歳の大学入学時、左胸上葉が結核に冒されたが、百回を超す気胸だけで60年の歳月を生き延びることができ、幸いであった。

小川雄一：[成] (おがわ ゆういち)

専門は核融合学。1999年より東京大学教授。2008年より東京大学大学院新領域創成科学研究科で核融合研究教育プログラムを立ち上げる。第三段階計画の主力装置であるITERの建設が開始された現在、原型炉建設を念頭に置いた第四段階計画のスタートを目指しています。

大林治夫：[共] (おおばやし はるお)

名古屋大学理学部(1959-1967)、同プラズマ研究所(1967-1989)、核融合科学研究所(1989-1995)。理論物理の立場を出発点とし、プラズマ・核融合の研究発展とそれを巡る社会的および自然的環境との関係に関心があり、現在は核融合アーカイブズの作業に参加。

金子 修：[共] (かねこ おさむ)

核融合科学研究所大型ヘリカル研究部教授。NBIを用いたプラズマ加熱が専門であるが、最近は安全管理の仕事も兼務している。一般共同研究委員会の所内幹事(雑務担当)を6年間務めており、双方向型共同研究委員会の委員(雑務担当)でもある。

川上一郎：[黎] (かわかみ いちろう)

日本大学名誉教授。専門はプラズマ理論・計算機シミュレーション。1958年核融合懇談会の事務局「文献センター」の主任。国内・外の研究情報を収集し、機関誌「核融合研究」を通じて組織広報活動。名古屋大学プラズマ研究所設立とともに文献センターは移管。同研究所専門委員会委員・幹事・委員長、核融合研究所運営協議員など。

河村和孝：[成] (かわむら かずたか)

高校生のとき、地元のアルミニウム電解工場見学で溶融塩が電解浴に使われていることに驚き、溶融塩に係りたく溶融塩の出番がありそうな核分裂燃料製造、核融合燃料(トリチウム)製造を対象に研究を進めてきた。総理府科学技術庁金属材料技術研究所、東京工業大学原子炉工学研究所、同所長、東海大学開発技術研究所(現総合科学技術研究所)を経て定年退職し現在に至る。

狐崎晶雄：[国] (きつねざき あきお)

1972年より日本原子力研究所。1979年から5年間、ダブレットIII核融合日米協力研究で原研チームリーダーとしてサンディエゴ滞在。1988年から10年間ITER理事会の日本側コンタクト・パーソン(CP)。(財)高度情報科学技術研究機構常務理事、理事長代行。現・研究参与。著書：「新・核融合への挑戦」、「青い地球を救う科学」など。

住田健二：[国] (すみた けんじ)

専門分野；中性子工学。日本原子力研究所、大阪大学工学部在任期間を通じて、パルス中性子法による中性子輸送現象の実験的解明の体系化研究に努めた。OKTAVIAN(大阪大学強力14 MeV中性子源)はその居城であった。この間に核分裂炉・核融合炉開発への研究面や国際協力の諸問題に参加協力した。永年、原子力計測分野での安全性関連の研究や規制面へも参画し、大学定年退官後は原子力安全委員、同委員長代理としての6年間の震ヶ関勤務をつとめた後は、自由な生活を楽しんでいる。

高村秀一：[共] (たかむら しゅういち)

愛知工業大学工学部教授、名古屋大学名誉教授。仏国グルノーブル原子核研究所、連合王国カラム研究所客員研究員、名古屋大学教授を経て2007年4月より現職。核融合PWI関連実験と大気圧マイクロ波ジェットを用いた電離ガス静電流体力学に向けた研究に従事。週末に楽しむ野菜栽培は少し腕が上がったかな。

宅間 宏：[成] (たくま ひろし)

原子・分子の物理学、量子光学を中心に半世紀以上にわたり研究。東大教授、日本電子(株)取締役、電通大教授、阪大レーザー研

授(併任)を経て、1980年電通大レーザー研究センターを設立し、1996年までセンター長。その後原研特別研究員を経て現在電通大名誉教授・レーザー研共同研究員。

田中和夫：[国] (たなか かずお)

専門はレーザー核融合特に、高速点火手法及びレーザープラズマ相互作用。さらにプラズマ壁相互作用へ展開中。IFSA (Inertial Fusion Sciences and Applications) などの国際会議議長を務める。プラズマ・核融合学会では、2004～2008にプログラム委員長と編集委員長を務めた。大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻教授(レーザーエネルギー学研究センター兼任)。

苔米地 顕：[国] (とまべち けん)

日本最初の原子炉 JRR-1から JRR-4, 高速実験炉 JOYO, 核融合実験装置 JT-60 の建設運転に従事。1986-88年, 那珂研究所長。1988-1990年, ITER概念設計運営委員会議長。1990-2000年, 電力中央研究所研究顧問。2006年より「妖精の森ガラス美術館」名誉館長。著書：ウランガラス(1995)。

難波忠清：[黎, 成, 国] (なんば ちゅうせい)

核融合科学研究所 OB。プラズマ・核融合学会とは前身の核融合懇談会時代から、「文献センター」などを通じて会誌の編集に20年以上携わるなど、永年のお付き合い。

西川恭治：[共] (にしかわ きょうじ)

プラズマ理論。1971年広島大学教授, 1978年核融合理論研究センター設立, プラズマ研究所専門委員長, 同運営委員, 核融合科学研究所運営協議員等を歴任して, 現在核融合科学研究所顧問。

西原功修：[共] (にしはら かつのぶ)

専門はプラズマ物理・レーザー核融合, 計算物理, 非線形物理。今春(2008)大阪大学レーザーエネルギー学研究センターを定年退職。現在同客員教授, (株)浜松ホトニクス, (有)キャトルアイ・サイエンスの顧問としてレーザープラズマ応用研究などを引き続き行っています。

伏見康治：[黎] (ふしみ こうじ)

専門は原子核物理, 素粒子物理, 統計力学。原子力の平和利用を訴え, 「原子力憲章草案」で提唱した「民主・自主・公開」の三原則は, 原子力基本法に盛り込まれた。名古屋大学プラズマ研究所初代所長。学術会議会長を務める。参議院議員(1983～1989)。エッセイの作品や連続幾何学模様を好み, 満枝夫人と『折り紙の幾何学』を著す。2008年1月, 『図解科学(1941～1944)』に連載された解説10編をまとめて, 『光る原子、波うつ電子』を出版。2008年5月8日, 満99歳の誕生日を目前にご逝去。(代筆：藤田)

藤田順治：[黎, 成, 共, 国] (ふじた じゅんじ)

専門はプラズマ診断。核融合科学研究所, 大同工業大学定年退職。現在は核融合のアーカイブズに関心を持ち, 名古屋市科学館での理科教育のお手伝い, 学会の英文誌「Plasma and Fusion Research」の幹事エディタ役等に気の休まらない毎日。

松田慎三郎：[国] (まつだ しんざぶろう)

京大修士のときヘリカルヘリオトロンの研究。その後原研に入り(1969-1988), JFT-1マルチポール, JFT-2トカマクのプラズマ閉じ込め研究を経て, NBI加熱装置の研究開発を進める。1988年より核

融合実験炉の計画に参画。那珂研究所長, 理事を経て現在原子力機構執行役。ITER理事会委員。ITERと幅広いアプローチが立ち上がるまでが自分の役目。

宮原 昭：[国] (みやはら あきら)

名古屋大学プラズマ研究所(1961-1989), 核融合科学研究所(1989-1991), 帝京大学経済学部・文学部・放射線学校(1991-1998), 名古屋大学プラズマ研究所では高温発生部門・技術研究部門(真空・表面物理工学)・核融合研究企画情報センター長などを歴任, 核融合科学研究所では技術部長を併任した。退官後は帝京大学経済学部で“情報機器概論”, 文学部で“科学文化史”と“科学と国際協力”, 放射線学校で“放射線機器概論”の講義を行なった。

宮本健郎：[成] (みやもと けんろう)

名古屋大学プラズマ研究所(1964-1979), 東京大学理学部(1979-1992), 成蹊大学工学部(1992-2000), 原子力研究所客員研究員(1992-2002), ITER Physics Expert Group (1999-2002)。プラズマ研では JIPP-I, JIPP T-II, 東大では故井上信幸教授とともに REPUTE逆磁場ピンチ装置などを用いて閉じ込め研究を行った。プラズマ関係の教科書を Springer, Taylor&Francis から最近出版。

森 茂：[黎] (もり しげる)

東京大学(理・物理)を経て, 1961～1988年日本原子力研究所にて核融合研究に従事。この間核融合研究がプラズマ物理から核融合工学を目指して展開するのを経験。またINTORワークショップ議長など核融合国際協力に参画。1990年より1996年まで青森県六ヶ所村の(財)環境科学技術研究所理事長, 現在同研究所顧問。

山中龍彦：[成] (やまなか たつひこ)

専門は核融合及びレーザー工学, 特に計測・診断に注力。大学院生時代より高出力レーザーの開発, レーザー核融合の研究に従事。1999年より阪大レーザー研センター長として1978年に提案した高速点火研究を推進, 2003年大阪大学定年退官。福井工業大学原子力技術応用工学科教授。

山本賢三：[黎] (やまもと けんぞう)

名大創立に際し富士通, 理研を経て赴任(1940), 高気圧グロー放電の研究を開始, 発展してプラズマ工学研究施設, 大電流トラス装置を建設した。プラズマ研究所創立に当たりホスト役を務めた。工学部長の任期切れを俟って原研に入所(1971), 原子力予算による国の核融合研究開発計画の立案・実施という使命で, JT-60の略完成をみて(1980)副理事長の任期を終えた。その後原産の常任相談役として産業界の協力を進めた。

吉川允二：[成] (よしかわ まさじ)

専門は高温プラズマの閉じ込め実験。1961-63年東大, 1963-71年GA社, 1971-98年日本原子力研究所。東大でのステラレーター(乱流加熱), GA社でのマルチポール, 原研でのトカマクと, 時代の流れに近いところで仕事ができた。このことは, 周りの方々のお蔭であり, また, 幸運にもよっていたと思います。

吉田善章：[黎] (よしだ ぜんしょう)

東京大学教授。専門は非線形科学, プラズマ物理学, 核融合科学。プラズマ・核融合学会では, 理事(2003～2007)としてPFR誌の創刊にあたりました。最近の学術活動としては, 『非線形とは何かー複雑系への挑戦』(岩波書店, 2008)を上奏しました。